

巻頭言

〈小特集〉

対話の促し——「子どものための哲学」について

Special Issue : Fostering a Dialogue: on “Philosophy for Children”

2020年1月26日、立命館大学（衣笠キャンパス）にて、間文化現象学研究センター主催のワークショップ「対話の促し」が開催された。この企画は、同センターのメンバー（客員協力研究員）である佐藤勇一氏（福井工業高等専門学校）の提案により、中川雅道氏（神戸大学附属中等教育学校）をお招きして実施されたものである。この小特集には、ワークショップでの発表をもとにした両氏の論考二編を掲載している。

ワークショップは、「子どものための哲学（p4c）」の実践と、この実践についての考察という二部構成であった。「子どものための哲学」とはどのようなものか、以下、ワークショップの趣旨文にもとづいて紹介したい。

p4c（Philosophy for Children [子どものための哲学]）とは、アメリカの小学校に哲学を導入するために、1970年代にマシュー・リップマン（1922-2010）によって開発された対等に発言できる環境を実現するための工夫が施されている教育方法のことであり、現在では世界各地の国や地域で実践されている。中川雅道氏は神戸大学附属中等教育学校においてハワイスタイルのp4cを日々実践し、近年では生徒たちと障害を有する共同研究者たちとともに対話を行っている。佐藤勇一氏は、2018年に中川氏をファシリテーターとして招いて、福井工業高等専門学校におけるp4cの初実践をし、その後、授業内にてp4cを取り入れ始めている。

p4cはその対話の授業時間にとどまるものではなく、その後も持続して再考を促し、対話の実践者や参加者だけでなくさまざまな人を問いに巻き込ん

でいく渦動力をもっている。現在では、日本でもさまざまな校種で、また学校に限らずさまざまな場所でそれぞれに工夫された取り組みが行われており、中川氏や佐藤氏の実践はそのひとつである。

本ワークショップは、まず参加者に p4c に参加してもらい、実際に「対話の促し」を体験する。その後の発表では、対話がさまざまな対立を巻き込みつつさらに探究を促すものであることを発表者がそれぞれの経験とともに論じる。中川氏は、多くの人が障害者に抱くステレオタイプが健常者と障害者を互いに孤立させていたことに対話が気付かせ、新たな問いを生み出すように促すことを、その実践とともに発表する。次いで、佐藤氏は、p4c における問いへの応答が、授業時間にとどまるのではなく、自身の文献研究との関連についての考察も促すものであることを発表する。発表を通じて、参加者に哲学対話について考える（考え直す）機会を提供できれば幸いである。

このような対話を通じた哲学教育の実践とそれをめぐる考察は、問文化性をめぐって研究を展開してきたセンターの研究に新たな視点をもたらすものであり、またそれだけでなく、大学における哲学教育の可能性を開くものとして、非常に興味深いものであった。

ワークショップでは、一般の参加者も含めた参加者全員がコミュニティーボールを回しながら一人ずつ話をしていき、「対話」の実践を経験することで、p4c とはいかなるものかを身をもって理解することができた。そして、続く両氏の発表からは、p4c の意義や可能性について多くを学ぶことができた。企画を提案していただいた佐藤勇一氏と、当日は対話実践のファシリテーターも務められた中川雅道氏に深く感謝したい。

文学部教授
亀井 大輔